

木と私たち 第8回講座

植物園で学ぼう

「日本最古の植物園で植物学の一端に触れましょう」

平成27年10月18日(日)

小石川植物園 → 六義園

天候に恵まれ散策するのに絶好の秋日になり、スタッフを含め10名参加となりました。時間に余裕があるので、小石川植物園を見学したあとに、近くの六義園に立ち寄りしました。経路は池袋から巣鴨で三田線に乗り換え白山下車で約10分歩き正門から入園しました。

【小石川植物園】

子ども連れの家族も多くみられました。正門を入り、まず記念写真を取り散策の始まりです。

正面にはショウキズイゼン、キミガヨラン、パンパスグラスなど、本館を右に回って、柴田博士のレリーフがあり、柴田博士が植物生理学の功績の賞金を寄付し作られた記念館には博士の研究資料などが展示されていました。



コチダリアの横からはイロハモミジの道を進むと、右ある温室は現在工事中で観る事はできませんでした。紅葉の時はきずいぶん綺麗なような道を抜けるとイチョウの実が落ちて独特の臭いがしています。樹齢は解りませんが、大きな幹のクスノキには驚きました。人と比べると幹の大きさがわかります。そこで西に曲がって 旧養生所の井戸がありました。



元の道に戻り、スズカケノキ、ユリノキ、トキワマンサク、サプトネツメ、シマサルスベリ、カリン、シロマツ、サンシュユ、カツラなどを一通り観察したら、12時半になっていました。

14時からは六義園で園内を開設するボランティアの「観光ガイド」があるので、急いで植物園を後にしました。

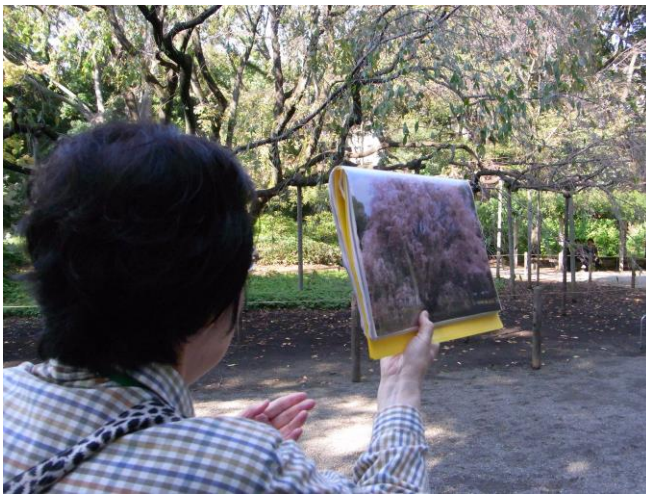
【六義園】

染井門はサクラの咲く時期以外は閉まっているので、正門に廻りました。すでにガイドの女性が待機しており、周りには説明を聞く入園者が集まっています。

説明板の前から園内ガイドの説明が始まりました。

柳沢吉保が作った六義園の概要を説明では、庭園の名称は、中国の古い漢詩集である「毛詩」の「詩の六義」、紀貫之が転用した和歌の「六体」に由来しているとのこと。次に内庭大門をくぐって、高さ 15m、幅約 20m のシダレザクラがありました。シダレザクラはどうしていただけるか？ ソメイヨシノの名は染井村で見つかったサクラにサクラとして有名な吉野のサクラを合わせて、ソメイヨシノの名が付いたとのことでした。

つぎは元禄六年(1693)当時の地図で江戸時代の説明があり、六義園の別邸となった岩崎彌太郎が昭和 13 年 3 月に当時の東京市に寄付したとのこと。



池のほとり立つと、中の島や蓬莱島、対岸の吹上浜などを望む美しい光景がありました。

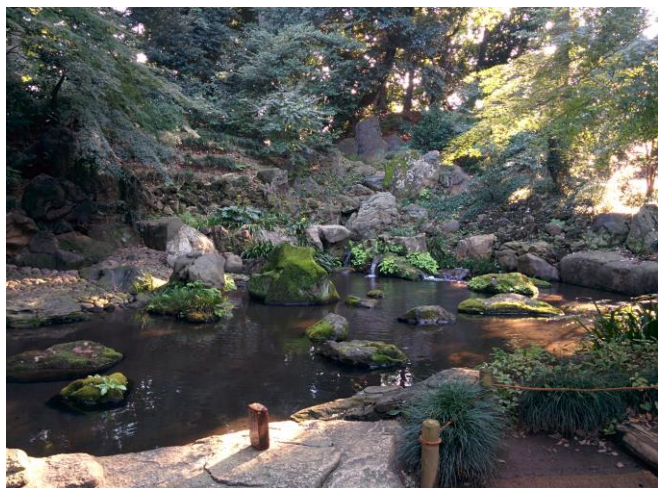
丁度、松の剪定をしており、松の手入れについて若い女性の職人にあれこれ尋ねたりして、ガイドに遅れ気味になりました。



六義園は、万葉集や古今和歌集に詠まれた紀州（和歌山）の景勝地「和歌の浦」やその周辺、中国の故事にならった風景を作ったとのこと、このような場所は園内に 88 ヲ所あり、六義園八十八境としてそれぞれの地に石柱を立てた。現在も 32 ヲ所に石柱が残っています。



次は滝見の茶屋、吟花亭跡、吹上松、吹上茶屋、岩崎家由来のつつじ茶屋（柱と梁がつつじの木とサルスベリの木） 標高 35 メートルの築山は藤代峠と呼ばれ富士見山と名づけられた山頂からの眺めはすばらしいものでした。



説明が1時間で丁度よい内容で、参加者一応に満足して15時30分に現地解散としました。